

最優秀賞

忘れてはいけないこと

東部中学校二年 杉 浦 菜々実

二〇二二年二月二十四日、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まった。侵攻という二文字を、受け入れるのに時間がかかった。

小さい頃から曾祖父から戦争の話を聞いていた私もニュースで侵略が始まったと聞いて、血の気が引いた。テレビに映ったウクライナは、まだ車が通っていて、歩いている人もいた。少し安心して、いつの間にか浅くなっていった呼吸を深くすることができた。数日たつと街は静かになり、人の気配は無く、不安が大きくなった。侵略が始まって一ヶ月経つと、民間の人が道路に倒れている映像が流れてきた。モザイク処理はされていたけれど、倒れている人を見ると無意識のうちに涙がこぼれた。銃声や爆発音を聞いて、思わずテレビを消してしまった。

消してしまうほど怖かったニュースも、二週間ほど

経つと慣れてしまった。そんな時、一緒にテレビを見ていた曾祖父が独り言のように呟いた。

「怖いな。」

戦争を経験している曾祖父が、普段の生活の中で「怖い」と言ったのが珍しかったので、

「この侵略、怖いと思う」

と聞いてみた。すると、

「怖いと思うよ。権力者が勝手に始めた争いで、平和を願う人が死ぬのが怖い。そして、その死を悲しめなくなるのは、もっと怖い。」

望んでいない争いで人が亡くなるのは怖いし、悲しいことなのに、それを悲しめないとは、どういうことだろう。人が亡くなるより怖いことは、いったいなんだろうと思ひ、

「人が死んじゃったときに悲しめないことなんてあるの。どうして怖いのか。」

曾祖父に聞いてみました。

曾祖父は、ゆっくりと話し始めました。

「戦争が激しくなってきた、空襲も多くなってきた時だった。空襲警報のサイレンと敵軍の飛行機の音がうるさかった。防空壕の中でじっと身を潜めていた。もししたら、太鼓みたいに胸に響くバーンっていう音がし

たの。敵機がいなくなつて、そとにでてみると」

そこで一度話が止まった。もう一度口を開いた曾祖父は、真剣でどこか寂しそうな表情だった。

「隣の防空壕が爆破されてたんだ。隣の防空壕には友達もいたけど、死んだ。」

私は、言葉に詰まってしまった。曾祖父が淡々と話すので、さらに怖くなった。数秒間の沈黙を破つたのは、曾祖父だった。

「その時に、涙が出なかったんだ。大切な友達で、仲間だったのに。悲しくなかったわけじゃないけど、そんなりとうけいれている自分がいた。身近な人がいなくなる度に、慣れていく気がして怖かった。」

その言葉を聞いて、自分と重なる気がした。初めて銃声や爆発音を聞いた時の恐怖は、涙が出るほどだったのに、今は普段の生活でも聞き流せるほど慣れていった。この侵攻によって命を落とした人や、傷を負った人を見ても、前より苦しくならぬことに気付いた。戦争の話を知っている時に「死」という言葉に反応するのに、ニュースで見る人の死に慣れてきている自分が怖くなった。

「戦争のときはね、」

話しだした曾祖父と目が合い、頭の中で止まってい

た時間が急に動き出した。

「戦争に行つて死ぬことがいいことだつて言われていたんだ。でも、そのときはみんなおかしかった。俺も少年兵に志願した。止められなかったら少年兵になっていたかもしれない。志願したと言つたらほめてくれる人もいたんだ。子供も大人もおかしかった。」

家族が大好きな曾祖父が少年兵に志願していた。戦争は生活だけでなく、考え方にも影響を与えてしまうと感じ、怖くなった。

そして、最後に一つ質問を試してみた。

「今起こつている軍事侵攻のこと、どう思う。どうなつてほしい。」

曾祖父は、少し考えてから答えてくれた。

「世界中の人に、何が苦しいことなのか、何が悲しいことなのか、してはいけないことは何なのか考え、忘れないでほしい。でも一番は、一日でも早く終わつてほしいかな。」

言い終わると曾祖父は、目を細めて笑つた。

苦しい事、悲しい事、してはいけないと言う事を忘れてはいけないと言う言葉は戦争や人の死を見てきた曾祖父だから言えることだと思ひました。私も一日も早く侵略が終わつてほしいと心から思ひます。

そして、最初にニュースを見て涙がこぼれた時の感情や、銃声や爆発音を聞いてテレビを消したくなる感覚を忘れたくないと思います。いえ、決して忘れてはならないのです。苦しい、悲しい物から目を逸らしたい時もあるでしょう。でも、この感情をわすれてしまっっては、本当に大切な物を失ってしまいます。だから、現実から目を逸らさず、いけない事はいけないと言え
る人でありたいと思います。